

天声人語

長崎市に住む被爆2世、高森ひとみさん(58)はこの6月、隣の諫早市にある小さな公園の清掃に孫2人を連れて参加した。74年前、ここに何百人もの犠牲者が運ばれ、茶毘に付された。

そんな話を小3と幼稚園児にもわかるよう伝えた▼高森さんは長崎被災協・被爆二世の会・諫早の会員だ。被爆者団体の活動に関わったことはなかったが、約7年前、考えを改めた。母の田中キ又ヨさん(82)の原爆症認定に伴う手続きをした際、本人に被爆状況を詳しく尋ねたのがきっかけだった▼当時、母は8歳。自宅にいて爆風に吹き飛ばされた。肌がザクロのようにただれた姉は、高熱に苦しみつづ数日後に亡くなった。初めて聞く話ばかり。母が雷鳴に耳をふさぎ、稲妻におびえるわけがやっとわかった▼原爆の話になると、母の口は重くなる。高森さんが不妊治療を受けたり、がんと診断されたりすると、「私が原爆に遭ったせいだ」と嘆く。被爆による子への遺伝的影響は確認されていないと研究機関は言うが、本人とその家族は不安を一掃できずに苦しむ▼一方、3世にあたる長女(31)は、高森さんの活動に理解を示しつつも行事には加わらない。「大切なのはわかるけど、いったい何世代先まで継げばいいの?」▼1世と3世の間で思いは揺れる。「でも、2世があきらめたらおしまい。昔々戦争があった、大きな爆弾が落ちた。それだけでは私たちは何も学ばなかったことになります」。重い記憶のりしー。長く遠く険しい道である。